Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-04-29

平家物語の延喜帝像 ： 「昔」の理想化と諸行無常

藪本, 勝治

(Citation)
国文学研究ノート,41:1-18

(Issue Date)
2007-01

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012371

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012371

平家物語の延喜帝像

――「昔」の理想化と諸行無常――

藪本勝治

はじめに

この世にこそ王位も無下にかるけれ、昔は宣旨を向ッてよみければ、枯たる草木も花咲き実なり、とぶ鳥も従ひけり。中比の事ぞかし。延喜御門、神泉苑に行幸あッて、池のみぎはに鷺のゐたりけるを、六位を召して、「あの鷺とッてまいらせよ」と仰ければ、いかでかとらんと思ひけれども、綸言なればあゆみ向ふ。鷺はねづくろひしてたゝんとす。「宣旨ぞ」と仰すれば、ひらんで飛さらず。これをとッて参りたり。「なんぢが宣旨に従ッて参りたるこそ神妙なれ。やがて五位になせ」とて、鷺を五位にぞなされける。今日より後は、鷺のなかの王たるべしといふ札をあそばひて、頸に懸けてはなたせ給。まッたく鷺の御れうにはあらず、只王威の程をしろしめさんがためなり。（上二八一～二八二頁）[1]

引用本文は『平家物語』覚一本巻第五「朝敵揃」の後半部分である（以下［引用①］とする）。延慶本では則天武后が花見のために宣旨で花を早く咲かせる話と並べられ、また鷺が「鵲」と変わっているが要旨自体に大きな違いはない。よく知られた五位鷺の説話である。ここでは「この世」に対置された「昔」における宣旨の威力を示す例として、「延喜御門」のエピソードが代表的に語られている。言葉の通じない鷺であっても「綸言なれば」逆らうことはできず平伏するという「王威」の理想化された説話である。しかし「王威」の絶対性が自明なものでないことは、引用本文中最後の一文が語っている。「王威」は忠実に従う者によって「しろしめ」されることで絶対的な威力を維持・拡張しえていた。共有されることで初めて効力を発揮する、いわばルールであったと言い換えることもできる。

このように［引用①］には平家物語の前提とするルールが象徴的に語られており、またそこで引き合いに出されているのは延喜帝すなわち醍醐天皇である。つまりこの場面において延喜帝は平家物語内部の論理の根幹に関わる秩序を表現の上で代表的に担わされていることになる。とすれば延喜帝のイメージを

分析することで平家物語の論理や構想を透かし見ることが可能となるかもしれない。しかし現在、平家物語研究において構想論的アプローチは決して盛んであるとは言えず、少なくとも延喜帝像に関する先行研究は皆無と言ってよい。そこで本稿では、平家物語における延喜帝像の象徴的意味について考察していきたい。またその補助線として、五位鷺説話でもうひとつ重要な役割を担っていた「宣旨」の威力に関する用例を分析する。そのような作業を経ることで、平家物語の中でひとつの社会的規範が覆り再編成されてゆく過程を垣間見ることができるはずである。

ただし一言に平家物語の構想と言っても、諸本によって多かれ少なかれ差異があるはずである。さしあたり本稿では、現在中心的に研究のなされている延慶本と覚一本を分析の対象とすることにしたい。両本の共通した特徴を述べる第二章まではほぼ同列に扱うが、第三章以降は二本の差異を考察するため延慶本と覚一本を別々に分析してゆくことにする。

まず立論の前提として、延喜帝についての一般事項を確認しておく。周知の通り、醍醐天皇の治世は、息子である村上天皇の治世とともに「延喜・天暦の治」と呼び習わされ、理想の聖代であったとされる。実際の延喜帝の治世はどうであったかというと、国史編纂、格式・儀式書の編集、荘園整理、和歌集の勅撰、文人貴族の活躍という面が指摘できる一方、戸籍・班田等律令制の解体、承平天慶の乱を誘発する地盤を作るなど「律令体制が崩壊あるいは変容した時代とされ、また最近の研究によれば、政治・社会・財政史上の重要な転機と考えられている[2]」というのが専らの評価である。この時代への見方が平家物語生成期までにどのような軌跡をたどったのだろうか。

先行研究[3]によると、延喜・天暦聖代観の発生と変遷は以下の

【表1】延慶本と覚一本の延喜帝記事

延慶本					覚一本		
引用番号	巻数（覚一本）	段数	内容	備考	巻数	章段名	内容
⑤	第一末（二）	十三	道真を配流	清盛の喩	巻第二	小教訓	同延慶本
⑧	第二本（三）	廿八	蝉丸の父	道行文	なし		
なし					巻第三	医師問答	異国相人の入京
①	第二中（四）	卅五	聖代の例	五位鷺	巻第五	朝敵揃	同延慶本
②	第三本（六）	四	聖代の例	高倉の喩	巻第六	紅葉	同延慶本
③			聖代の例	高倉の喩			同延慶本
④		五	聖代の例	高倉の喩	なし		
⑥		十三	堕地獄	清盛の喩	なし		
⑨	第五末（十）	八	蝉丸の父	道行文	巻第十	海道下	同延慶本
⑩	第六本（十一）	卅	蝉丸の父	道行文	なし		
⑦	第六末（十二）	廿五	地獄で詠歌	女院の喩	なし		

ようにまとめられる。延喜帝崩御の後、円融帝から一条帝の治世に不遇をかこつ文人貴族の間で、公平な人事を根拠に延喜帝の治世を「聖代」とみる向きが発生し、院政期にはこの見方が公家貴族層全体へ広まった。さらに鎌倉時代には説話・唱導・琵琶法師の語り等を通して社会の各層へ浸透し、共通認識となっていった、というものである。一方で延喜聖代観の発生以前に『日蔵夢記』による延喜帝堕地獄説話が発生している。以後、『扶桑略記』を始め『北野天神縁起』『宝物集』『愚管抄』などに広く引用されこの言説も広汎に流通していた。

さて、かくして平家物語の生成期に至るわけだが、覚一本と延慶本における延喜帝記事を一望してみると、【表1】のようになった[1]。

なお表中の丸番号は引用の順に振ってあり、巻数の括弧内の数は覚一本の該当箇所にあたる巻数である。また備考欄に「清盛の喩」などとあるのは、清盛の行為の比喩として延喜帝が引き合いに出されたことを意味する。それでは、以下に個々の本文を分析していくことにしよう。

一、延喜聖代――「昔」への憧憬＝危機

まず、冒頭の［引用①］と同じく延喜帝を理想的な聖帝とみなす記事をみてゆく。［引用①］以外には次のような本文が見られた。

［引用②］

優ニ艶ク人ノ思付マヒラスル様ナルスヂハ、恐クハ延喜天暦ノ帝モ、カクシモ御シマサズヤ有ケントゾ覚ヘシ。（上五七七～五七八頁）

［引用③］

彼延喜ノ聖ノ、四海ノ民ノ何ニサムカルラムトテ、御衣ヲヌガセ給ケム事思食出シテ、吾帝徳ノイタラヌ事ヲ歎カシク思食ツヽ、御心ヲヒソメカヘシテ御シケルニ……（上五七八頁）

［引用④］

「世ヲ此君ニツガセ奉ナバ、恐クハ延喜天暦ノ代ニモ立帰ナマシトコソ思ツルニ、カク前立給ヌル事ハ、只吾身ノ微運ノ尽ノミナラズ、国ノ衰弊、民ノ果報ノ拙ガ至ス所也」トゾ歎セ給ケル。（上五九二頁）

引用したのは延慶本の本文であるが、覚一本の該当本文も同内容であった。ただし［引用④］の記事は覚一本にはみられない。この三つの記事はいずれも高倉院のいわゆる追悼説話群の中に位置し、ほとんど連続して現われている。内容も高倉院のすばらしさを延喜（および天暦）帝に擬するものである。

まず［引用②］と［引用③］であるが、覚一本ではいずれも直接に高倉院の話となっている。これが延慶本ではともに堀河帝の逸話として挙げられているわけであるが、そもそも堀河帝が引き合いに出されるくだりは、高倉崩御に対する後白河の悲

しみを堀河崩御に対する白河の悲しみに喩えて高倉の人徳を堀河の人徳に重ねる論法の上に出現している。そのためこの場面では堀河帝が延喜帝に擬されているが、延喜帝が高倉の参照枠として機能していることに変わりはない。

［引用②］は草子地による堀河帝への評語である。「恐クハ延喜天暦ノ帝」さえも及ばないほど立派な人物である、との評価である。次に［引用③］は、ある冬の夜、寒さに目覚めた堀河帝が、同じような寒夜に延喜帝が民の寒さを思いやって自らも衣を脱いだとの話を思い出して、自分の政治を省みるという記事である。この延喜帝のエピソードは有名で、『大鏡』に初出、以後複数の説話集に引用されている。[5]『続古事談』や『十訓抄』では集の冒頭に据えられており、帝範を解く文脈で代表的に述べられる説話である。

そして［引用④］は高倉院崩御に伴う後白河院の独白であるが、ここで言う「世ヲ此君ニツガセ奉」るとは院政を行なう権限＝治天の君のポストを高倉に継承させることを意味すると解釈するのが穏当であろう。もし彼が治天の君を継承していたなら「恐クハ延喜天暦ノ代」の再現となるほど立派な治世になったであろう、との記述であり、［引用②］と類似する。

このように延喜帝を理想の聖帝とみなす記事は、いずれも高倉院の帝徳の比喩として引き合いに出される形で現われる。［引用④］が語る通り、平家物語において高倉院の崩御には「国ノ衰弊」が象徴させられており、延喜帝はそのような失われた理想の治世の参照枠として語られていると言えよう。[6]

さて、ここで再び冒頭の五位鷺説話をみてみると、そこに描かれていた延喜帝も以上に指摘した「失われた理想の治世の参照枠」という造形にぴったり当てはまっている。平家物語における延喜帝像の一側面がこのような造形に還元できるわけであるが、この事実は五位鷺記事が「昔」の「王威」を懐かしむ説話であったことと深くかかわっていよう。

「昔はよかった」という懐旧の嘆きは人類の普遍的な発想であるのかもしれない。人は老いるし、人間の技術も自然の環境も時代とともに変化してゆく。かつて当たり前であったはずのものが当たり前でなくなったと感じられるとき、人は「昔」を理想化するだろう。五位鷺説話において理想化された「昔」の「王威」を具体的に代表させられたのは、延喜帝という存在とともにその「宣旨」の威力であった。ここで、平家物語本文中における「宣旨」の用例をみてみよう。

二、宣旨の威力

覚一本における「宣旨」の用例を【表2】にまとめた。[7]

表を一見して明らかな通り、用例の多くは宮廷における諸権利与奪の宣旨であり、これは巻第一に集中している。またその中に宣旨が否定されるような例はなかった。また「鹿谷」や「御輿振」にみえるような、宮廷の外部へ発せられる宣旨に関しても同様のことが言える。つまり少なくとも、おおよそ安元三年までを描く巻第一の世界においては「宣旨」が支障なく有

【表2】「宣旨」の用例（覚一本）

巻数	章段名	内容	備考
巻第一	鱸	清盛が「牛車の宣旨」を受ける	
	吾身栄花	清盛女が「准三后の宣旨」を受ける	
	二代后	多子が入内の宣旨を受ける	
	額打論	六条が「親王の宣旨」を受ける	
	清水寺炎上	高倉が「親王の宣旨」を受ける	
	鹿谷	基房が「兼宣旨」を受ける	
		賀茂社神人が成親の外法停止の宣旨を得る	
	御輿振	頼政が山門大衆に宣旨を主張	
巻第三	大塔建立	覚快法親王が「牛車の宣旨」を受ける	
	大臣流罪	藤原兼通が「内覧の宣旨」を受ける	異例の出世の先例
巻第四	厳島御幸	清盛が「准三后の宣旨」を受ける	
	信連	**「別当宣旨」×3**	**→本稿で分析**
巻第五	朝敵揃	**「宣旨」×4**	**→本稿で分析**
	咸陽宮	始皇帝が逆賊追討の宣旨を下す	謀反失敗の先例
巻第六	慈心房	慈心房が地獄から招待の宣旨を受ける	主語は「閻魔王宮」
	横田河原合戦	**宣旨が無効化**	**→本稿で分析**
巻第八	鼓判官	**知康の宣旨語り**	**→本稿で分析**
巻第十	藤戸	義経が「使の宣旨」を受ける	
灌頂巻	大原入	女院は十五の時「女御の宣旨」を受けた	承安元（一一七一）年

る。かつて絶対の威力を誇った天皇の宣旨は、この記事以降次第に相対化されてゆくことになる。「信連」の本文を引用してみよう。

A

出羽判官光長は、馬に乗ながら門のうちに打入り、庭にひかへて大音声をあげて申けるは、「御謀反の聞え候によッて、官人共別当宣を承はり、御迎へにまいッて候。急ぎ御出候へ」と申ければ、長兵衛尉大床に立ッて、「是は当時は御所でも候はず。御物まうでゞ候ぞ。何事ぞ、事の子細を申されよ」と言ひければ……（上二一七頁）

B

「いかに宣旨の御使をばかうはするぞ」と言ひければ、「宣旨とはなんぞ」とて、太刀ゆがめばおどりのき、おしなをし、ふみなをし、たちどころによき物ども十四五人こそきりふせたれ。（上二一八頁）

C

信連を大庭にひッすゑさせ、「まことにわ男は、宣旨とはなんぞとてきッたりけるか。……」とぞのたまひける。信連すこしもさはがず、あざわらッて申けるは、「このほどよな〳〵あの御所を物がうかゞひ候時に、なに事のあるべきと存て、用

効に機能していたと考えられる。

その様相が変化を見せるのは、巻第四「信連」の例からであ

心も仕候はぬところに、よろうたる物共がうち入ッて候を、「なに物ぞ」ととひ候へば、「宣旨の御使」となのり候。山賊・海賊・強盗なンど申やつ原は、或は「公達のいらせ給ふぞ」或は「宣旨の御使」なンどなのり候と、かねゞうけ給はッて候へば、「宣旨とはなんぞ」とてきッたる候。……」（上二一八頁～二一九頁）

ここで話題に上っている「宣旨」は「別当宣」のことであるが、検非違使の職掌から考えてこれも性質としては天皇の宣旨に准ずる威力が期待されるべきものである。[8] ここで初めて、宣旨の威力にかかわる記述が現われている。まずAでは、以仁王の謀叛を察知した清盛の差し向けた検非違使が別当宣を奉じて押し入るが信連は少しもひるまず説明を求める。続いてBでは、かまわず押し入る検非違使らに対して信連が果敢に応戦する場面であるが、繰り返し宣旨を奉ずる検非違使に対して信連は「宣旨とは何ぞ」とそれをものともせずに大立ち回りを演じる。更にCは、拿捕された信連が清盛・宗盛に尋問される場面である。件の「宣旨とは何ぞ」との発言が殊更に咎められるが、信連は「すこしもさはがず、あざわらッて」その発言の正当性を述べる。いわく、最近では「山賊・海賊・強盗」などが宣旨の使いを名乗って押し入ると聞いていたのでこのように振舞ったという。宣旨の無効化が見て取れるエピソードであるが、この異常を信連一人の個性に還元することはできない。引用部分の後、信連の弁解を聞いた「平家のさぶらい共」は彼が死刑にされることを「口々におしみ」、清盛は結局死刑を曲げて流刑に処している。どうやら宣旨の威力はこの時点で地に落ちてしまっているようである。[9] そのような時代全体を覆う雰囲気が、このエピソードには描かれている。それではその原因は何に求められるのだろうか。まずは物語内部のレベルで考えるために、もう少し用例を追ってゆこう。

次に宣旨の威力に関して述べられているのは、冒頭に引用した巻第五「朝敵揃」の前半部分である。五位鷺説話の前に、以下の本文が語られる。

夫我朝に朝敵のはじめを尋れば、やまといはれみことの御宇四年、紀州名草の郡高雄村に一の蜘蛛あり。身みじかく足手ながくて、ちから人にすぐれたり。人民をおほく損害せしかば、官軍発向して、宣旨をよみかけ、葛の網をむすんで終にこれをおほひころす。（上二八〇頁～二八一頁）

『日本書紀』などに語られる有名な話であるが、土蜘蛛は「宣旨をよみかけ」られることで動きを封じられ、「葛の網」により捕獲されたのである。引用部分の後、同様の系譜上にあらゆる朝敵が並べられ、五位鷺の説話に続いてゆく。

兵藤裕己氏はこの部分を分析し、「朝敵」の系譜上に置かれる存在が源氏から平氏にシフトして行く反転の構図をドラマティックに論じるが、[10] 宣旨の威力を問題にするとき、五位鷺説話の冒頭で「この世」における「王位」の凋落が嘆かれていることを

考えれば、兵藤氏の指摘は非常に示唆的である。「この世」において「宣旨をよみかけ」るべき対象は、本来源氏であった。しかしその圧倒的な暴力の前に平氏が敗れ去ってしまった物語内部の現実が、宣旨にまつわる正当性の論理をずらしてしまったのではないのか。

次に現われる宣旨の威力に関する記事は、高倉院と清盛が立て続けに没した後に描かれる。「横田河原合戦」の末尾部分である。巻第六は以下の記述をもって閉じられる。

南都北嶺の大衆、熊野金峰山の僧徒、伊勢大神宮の祭主神官にいたるまで、一向平家をそむひて源氏に心を通はしける。四方に宣旨をなしくだし、諸国に院宣をつかはせども、院宣宣旨もみな平家の下知とのみ心得て、従ひつくものなかりけり。（上三六九頁）

宣旨が無力化した様が端的に表現されている。そしてまた、なぜこのような状況が出現したのかということについても、この本文は明瞭に語ってくれている。世の中の勢力が皆源氏へ翻ってしまったからである。宣旨の威力の凋落と平氏の威勢の凋落は表現の上で対をなしている。社会に通用する命令の威力を支えたのは、源氏と平氏のどちらが正当であるかという根拠ではなく、どちらのルールが広汎に共有されているかという現実であった。冒頭でも触れたが、ルールは共有されることで初めて効力を発揮する。宣旨とはまさにそのようなものであった。[11]

宣旨の威力にかかわる最後の用例は、巻第八「鼓判官」である。地に落ちた宣旨の威力が象徴的に描かれている。また、ここではそれに代わる新たなルール、すなわち宣旨の絶対性に対する東国武士のルールが提示されている。

大音声をあげて「むかしは宣旨をむかッてよみければ、枯たる草木も花さきみなり、悪鬼悪神も随ひけり。末代ならむがらに、いかんが十善帝王にむかひまいらせて弓をばひくべき。汝等がはなたん矢は、返ッて身にあたるべし。抜かむ太刀は身をきるべし」なンどとのゝしりければ、木曾「さな言はせそ」とて、時をどッとつくる。（下一〇四頁）

圧倒的な武力を誇る義仲に対峙し、知康は悲しくも滑稽に宣旨の威力を語りかける。この段前後における知康の戯画的な振る舞いは引用本文の直前での「若き公卿殿上人」による「風情なし。朝康には天狗ついたり」との嘲笑により象徴的に評されるが、傍線部のくだりには「朝敵揃」の宣旨言説が意識されている。どうやら知康の振る舞いは彼の個性に還元することで納まる以上の問題を孕んでいる。宣旨の論理を高らかに語る知康の滑稽からは京都の貴族たち皆の論理を代表している側面を読み取りうるのではないか。そして正当性を語る彼の詞は暴力を突き付ける鬨の声で返されている。ここではコミュニケーションが成立していないわけであるが、それが「猫間」において描かれる義仲の言語不通的性質と呼応しているのは明らかである。

重々指摘されている通り、義仲はルールを共有しない他者として描かれている。[12]

かつて当たり前であった宣旨の威力は、この時点においてもはや当たり前ではない。その変化に直面して「朝敵揃」が意識され、「昔」が理想化されて語られているのであるが、「この世」では既に新たな社会権力が勃興している。平家物語生成期においてそれは鎌倉幕府であり、彼らに従う東国の武士たちであったろう。ここで物語外部のレベルに眼を転じよう。

義仲の暴力は平家物語において義仲の個性に還元されており頼朝とは隔絶したものとして描かれるが、暴力を旨とする彼の他者性は、精神史をたどれば承久の乱における鎌倉軍の位相と直結しているように思われる。宣旨の論理が通用しない義仲は、単に秩序から逸脱してゆく一個の反逆者ではなく、京都の貴族から見た東国の武士たち皆の論理を代表させられている側面があるのではないか。その東国武士の論理が真っ向から京都の貴族の論理をねじ伏せたのが法住寺合戦の精神史的な意味だったのではないだろうか。[13]

本郷和人氏は、承久の乱後の社会権力の情勢を鮮やかに描出している。[14]まず諸氏の先行研究を整理した上で、在地領主論に基づいて東国の武士たちを「人殺し」ととらえ、「当時の貴族とは、全く異質な人々であった」と規定する。次に外交と軍事の主導権が朝廷よりも幕府にあったという分析から、一権門としてではなく穏やかに独立した「東国の王権」を想定する「二つの王権論」を標榜。続いて承久の乱および朝廷の武力放棄を列島における社会権力構造の大きな転換点とし、以下のように述べる。

> 三上皇の配流、公卿の処刑。幕府はそれまでの通念では考えられぬ苛酷な処置を乱の後にとっている。強制力の重要な一要素であった朝廷の観念的な尊厳が武士によって完全に否定される有様を、諸権門は目のあたりにしていた。武士に倣った権門の暴力の前には、公家の伝統的な権威はしばしば無力と化した。彼らを沈黙させたのは、より強力な武士への畏怖のほかにない。それゆえ王であろうとするときに、朝廷は止むを得ず、幕府に依存せざるを得なかった。（一二四頁）

更に「暴力の参入」と題する一節で、死穢を忌避する貴族の論理と「人殺し」である武士の論理の優劣が乱をもって逆転する様を「朝廷の権威が瓦解し、武士の世の始まりを人々に告げ示す事件、それが承久の乱であった。武士は人々の意識を変革したこの時点において、貴族に代わる存在となった。」（一三一頁）と述べる。東西には異なる別々の論理を持った文化が存在し、承久の乱を境にその優劣関係が逆転するとの説である。非常に簡明な立論であり、当時の複雑な朝幕関係にはこぼれ落ちる点も多いかもしれないが、京都・鎌倉の両権力を論理的に相対化し得ている卓見であろう。[15]あたかも平家物語生成期に当たるこの時期は、列島における社会権力構造の再編期であった。

そしてこれらのことから、京都の論理が東国の論理に蹂躙される瀬戸際であった法住寺合戦は精神史的に「暴力の参入」の端緒となる事件であったと言えるのではないか。[16] このような現実が物語内部のレベルに影を落していると考えることは、さほど不自然なことではないであろう。

三、延喜帝堕地獄説話――「昔」の反転＝転覆

ここまで、平家物語における延喜帝が理想の聖代を代表する参照枠として機能していること、また理想化される「昔」を象徴する「宣旨」の威力が物語の進行に従って無効化してゆくことを述べてきた。更に、そのような「昔」の衰微が、平家物語生成期の社会変化と対応しているらしいことも指摘した。それでは、延喜帝の描かれ方は物語の進行の中でどのように変化しているのだろうか。次にこの点を、まずは延慶本について見てゆく。

はじめに述べた通り、円融帝代の頃から延喜帝は聖帝として認識されている。しかし聖代観の発生以前から、延喜帝の堕地獄説話もまた流通していた。この言説は平家物語本文にも流れ込んでいる。本文を引用しよう。

［引用⑤］

北野天神ハ時平ノ大臣ノ讒奏ニヨッテ、延喜ノ御門ニ被流奉リ、西宮大神ハ多田ノ新発ガ讒言ニヨッテ安和ノ御門ニ被流給キ。各無実ナリケレドモ、流罪セラレ給ニキ。是皆延喜ノ聖主、安和ノ御帝ノ御僻事トコソ申伝タレ。上古猶如此。況ヤ末代哉。賢王猶御誤アリ。況ヤ凡夫哉。（上一三二頁）

［引用⑥］

昔シ金峯山ノ日蔵聖人ノ、無言断食ニシテ行ヒスル間、秘密瑜伽ノ鈴ヲニギリナガラ、死入タル事侍ケリ。地獄ニテ延喜御門ニ会マヒラセタル事アリキ。「地獄ニ来ル者、二度閻浮提ニ帰ル事ナシトイヘドモ、汝ハヨミ返ベキ者也。我、父寛平法皇ノ命ヲタガヘ、無実ヲ以テ菅原右大臣ヲ流罪セシツミニヨリテ、地獄ニ落テ、苦患ヲ受ク。必ズ我王子ニ語テ、苦ヲスクフベシ」ト仰有ケレバ、畏テ承ケルヲ、「冥途ハ罪ナキヲ以テ主トス。聖人我ヲ敬フ事ナカレ」ト被仰ケル事コソ悲シケレ。賢王、聖主、猶地獄ノ苦患ヲ免レ給ハズ。何況入道ノ日比ノ振舞ノ躰ニテ思ニ、後世ノ有サマ、サコソハオワシマスラメト思遣コソ糸惜ケレ。（上六一〇頁）

［引用⑦］

延喜ノ聖主ノ地獄ニ堕サセ給テ、金峯山ノ日蔵上人ニ向セ給テ「イフナラクナラクノ底ニヲチヌレバ刹利モ首陀モカワラザリケリ」ト、炎ノ中ニシテ悲セ給ケムモカクヤト、哀ニゾ被思食ケル。（下五〇九～五一〇頁）

まず［引用⑤］はいわゆる小教訓の場面で、鹿ケ谷の陰謀に

激昂する清盛を賢臣重盛が冷静に諫める台詞の一部である。陰謀の主要メンバーである大納言成親を清盛は直ちに斬首しようとするが、重盛は道真を左遷した延喜帝の例・高明を左遷した冷泉帝の例を挙げて過重な処刑を制止している。覚一本の該当箇所もほぼ同文である。ここでは堕地獄について直接述べられてはいないが、『源平闘諍録』一之下十二の同じ場面ではここから堕地獄説話に話が及んでいる。［引用⑤］のような言説には延喜帝の堕地獄が当然意識されていたものと思われ、それが清盛の行為に対する参照枠として語られていることは重要である。周知の通り清盛はやがて地獄に堕ちるのであるし、そのことは「祇園精舎」の時点から暗示され続けている。諸行無常の系譜上、あるいは朝敵の系譜上に位置づけられた清盛の参照枠として、延喜帝が語られている。しかし、第一本の時点では直接言が及んでいないこともまた重要であろう。ここではまだ、延喜帝は宮廷の内にある「聖主」の造形から外れていない。

次に［引用⑥］は覚一本にはない記述で、清盛死去の場面である。高熱を発し悶え死んだ清盛の後生を案じる記述で、生前の罪業から堕地獄は免れまいという文脈により『日蔵夢記』の延喜帝堕地獄説話が引き合いに出されている。これもまた清盛の参照枠として延喜帝が語られているわけであるが、ここでははっきりと罪業によって地獄で苦しむ姿が描かれている。この記事は、物語の進行でいえば引用番号②③④の記事と同じ第三本に語られる場面である。平家物語において高倉・清盛の打ち続く死去が平家転落の契機となる物語構造は一見して明らかな通りであるが、そのような時間的にも意味的にも連続した二つの場面において、対照的な延喜帝の像が連続的に想起されている。延慶本第三本において、延喜帝像は言わば反転しているということになる。

ここでもう一度五位鷺説話の記事に注目したい。改めて見るとこの記事もまた、平家転落の端緒となる源氏挙兵の場面で出現していた。位置的にも引用番号②③④⑥と近い。ここに描かれる延喜帝はどの人物の参照枠であるかというと、「謀叛は成立しない」という文脈で語られることから、自然に読めば源氏を鎮圧する勢力である朝廷側の権威一般の参照枠と考えられるだろう。五位鷺説話の時点では、その側に平家一門も含まれる。しかし結果的にみると、清盛の死去を契機に大勢は逆転し、朝敵は平家へと改まり、宣旨はその威力を失う。どうやら延慶本第三本における延喜帝像の反転は、平家一門の転覆と対を成しているようである。その傾向は、平家が滅んで一人生き残った建礼門院を描く［引用⑦］に至って一層明らかとなる。

［引用⑦］は、いわゆる大原御幸における後白河院の心境描写である。この記事も覚一本にはなく、引用番号⑥⑦の延喜帝像は延慶本の次元に限定して考えねばならない。女院の草庵を訪ねた後白河院はそこで地獄を描いた絵図を見て地獄に堕ちた延喜帝を連想する。最後の部分、「カクヤ」とあるがこれが何を指しているのかによって解釈が変わってくる。1「カクヤ」は地獄絵を指し、延喜帝の味わった地獄を主語とする、2「カクヤ」は女院の心境を指し、延喜帝の観念した心境を主語とす

る、という二通りが考えられそうだが、「カクヤ」は「炎ノ中ニシテ悲セ給ケムモ」から続いているため、どちらとも解釈できそうである。「炎ノ中ニシテ」に重点を置くと1となり、「悲セ給ケム」に重点を置くと2となろうか。しかし前後の文脈を鑑みるに、このあたりは一貫して穢土を厭い浄土を願う女院の暮らしぶりが描かれているため、2の解釈の方が穏当であるように思われる。つまり［引用⑦］の延喜帝は、女院の参照枠として語られたということになる。

延慶本における延喜帝堕地獄説話は一貫して、転覆した平家の人々の参照枠として表現され機能しているようである。そのような延喜帝がかつてのようには聖代を背負っていないことは彼の和歌が語っている通りである。[17] 延喜帝の「悲セ給ケム」という心境はそのまま女院の心境に重ねられているが、これが「祇園精舎」の冒頭文と呼応しているのは明らかであろう。延喜帝が自らの聖代を無常の系譜の上に位置づける傾向は［引用⑥］において既にみえており、「冥途ハ罪ナキヲ以テ主トス。聖人我ヲ敬フ事ナカレ」との発言で自らの聖性を否定している。また、思えば五位鷺説話以来の延喜聖代観の枠組み自体、理想の聖代が「昔」のこととして語られる時点で既に無常の系譜の上に位置づけられていたのではないか。

延喜帝の立ち位置は最初から変化していないのかもしれない。それはこの物語における平家一門もまた同じである。変わったのは社会状況であり、社会に通用する正当性の質である。物語の中で、それは人々を、ひいては世界を動かす力を意味する。「昔」の延喜帝が理想の聖代を現出し得たのは絶対の威力を持つ宣旨を発し得たからであったが、今や宣旨の威力は世界を動かす力たりえなくなってしまった。物語の進行とともにその事実が明らかとなるに連れ、「昔」を代表する延喜帝の像はだまし絵のようにその姿を反転させる。光の当たり具合によって正反対の別物に見えるその絵画は、東西の論理における優劣関係の逆転とともに理想世界の聖主から地獄の亡者へと反転し、新たな光はどうやら東から差している。宣旨の無力化を語る記述は、時系列的に清盛の死去および平氏の転落と対をなすように出現する。続いて「鼓判官」において、もはや滑稽にしか語られない宣旨の論理に代わって台頭してきた新たな論理は、源氏の武力の論理であった。

帝範の代表である延喜帝の平家物語における造形は、表現の上で平家一門の転落の参照枠として現れていた。「朝敵揃」において追討の主体であった平家は宣旨の正当性に従っていたが、物語のレベルにおける彼らの転落は王威に裏付けられた宣旨の正当性そのものがもはや「昔」のものとなってしまったことによる。そのような物語には、現実のレベルで京都の貴族たちが味わった社会の変化が反映されていた。では続いて、そこにいかなる感慨が読み取れるかという点を掘り下げていこう。

四、蝉丸の父――「昔」の浄化＝更新

ここまで理想的聖帝としての、また地獄に堕ちた延喜帝を見

てきたが、残る延喜帝の用例は延慶本では【表1】の引用番号⑧⑨⑩の三例である。なお覚一本は⑨にあたる記述しか持たない。延喜帝像に直接の言及はないため本文の引用は控えるが、いずれも道行文の中で蝉丸に触れられる記事でその父親の名として延喜帝が挙げられている。

蝉丸といえば百人一首で有名な和歌「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」であろう。出会っては別れてゆく無常の理を詠った歌であるが、それはある安定した共同体から外れた境界の地に身を置いて初めて感得される真理である。右の歌は『後撰和歌集』に入っており、それは蝉丸の初見でもある。以後宮廷の視線は蝉丸像を時代とともに様々に変遷させていったが、平家物語生成期の代表的な蝉丸像は「盲目となって宮廷から出て行った和歌と琵琶の名手」であったろう。[18] 平家物語に現れる蝉丸の造形もこれをよく反映している。加えて平家物語では延喜帝の息子とされているわけであるが、辺境の地に身をやつして無常の理を詠う蝉丸の姿はこれまで見てきた延喜帝の像（特に［引用⑦］）と容易に重なり得る。延慶本に現れる蝉丸の用例は、先に挙げた三つ以外にもう一例存在するが、それは［引用⑦］と同じく第六末廿五「法皇小原へ御幸成ル事」に見える記事である。

合坂ノ蝉丸ノ「世ノ中ハトテモカクテモ有ヌベシ宮モワラ屋モハテシナケレバ」ト詠ジケルモ理ト思食知レケリ。（下五一一頁）

この記事は、影印の料紙にして［引用⑦］から三頁と隔てずに書かれている。二つの記事に直接の連関は見出し難いが、穢土を厭い浄土を願う女院の暮らしぶりが延々と語られる文脈を媒介として、二つの記事は同一の論理上に語られている。両記事に含まれる和歌の近似性がその論理の近似性をよく語ってくれている。その論理とは、言うまでもなく諸行無常の理である。右の引用文から更に料紙換算で二頁と隔てずして、次の記事が語られる。

障子ニハ諸経要文、様〳〵ノ詩歌ナムド被書散タリ。「諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅為楽」ノ四句ノ文、一切ノ行ハ是皆無常也。（下五一二頁）

これもまた、同じ文脈を媒介として語られる同一論理上の記事であるが、「諸行無常」の文言が直接出現している。このように、延慶本における延喜帝は後白河の視点から描かれる諸行無常の理の中に回収されてゆく。

先述の通り、平家物語生成期に当たる時期は列島における社会権力構造の再編期であった。かつての社会的規範が無効化し、威勢を誇る新たな規範を肯定するしかない現在にあって、それでも自分たちの論理を捨てられない転換期の貴族たちは、その社会変化に対応するために自分たちの論理を上手にずらし更新するような物語を必要とした。それが平家物語の生成における一つの大きな原動力となったのではないだろうか。そのような

平家物語の構想を総括するのが後白河法皇による女院訪問である。[19] この場面において、かつての社会権力の無効化が「諸行無常」の論理へと転換されている。

かつて栄華を誇った平家一門の参照枠として、聖代の代名詞であった延喜帝は無常の系譜の中に位置付けられる。ほころびを排除するように社会のルールを変形し、正当性の論理を更新することで、京都の貴族の自己同一性自体は維持されてゆく。しかし彼らにとって、排除された山羊の立っていたその場所は以前自分たちも当たり前のように立っていた場所であった。後白河院自身が語るように、「諸行無常」の言葉は「一切ノ行」へと向けられている。今滅んだのは平氏であり、地獄に堕ちたのは延喜帝であったが、そこにいたのは我々であったかもしれない。次に地獄に堕ちるのは我々であるかもしれない。

そのような意味で、「諸行無常」という言葉は二重の指向性を持っていると言うことができるのではないだろうか。一つは現実的な同一性の危機を過去の過失に帰して同一性を更新する指向性であり、もう一つは、現行の社会規範はいつでも転覆しうるのだという不安の普遍性を暴露する指向性である。変わり続けるという不変の真実を言い当てる後者の指向性は、延喜帝の詠歌と蝉丸の詠歌とに共有されている。

五、覚一本の変化と保持——結びにかえて

ここまで、五位鷺説話に始まり延慶本第六末廿五「法皇小原へ御幸成ル事」に至る平家物語中の延喜帝像を読み解いてきた。物語の前半において延喜帝は理想化された「昔」を代表するように聖代を担ってきた。しかしそれは「宣旨」の威力に象徴される王権の絶対性がもはや過去のものとして語られていることを含意している。その不安が表面化するように、延慶本第三本において延喜帝は一転して地獄に堕ち、それは清盛のアナロジーとして語られていた。そして延喜帝は物語末尾で再び平氏一門の比喩として、諸行無常の論理に回収されてゆく。しかしそのような延喜帝の記述からは、回収の回路を突き破ってこちら側に迫ってくる真実の暴露を見出すことができた。

さて、一方、語り系諸本の大原御幸では延喜帝も蝉丸も触れられていない。そもそも、覚一本では延喜帝の堕地獄説話自体語られていない。一般的に簡略化を旨とする覚一本においては参照枠として触れられているにすぎない傍系話が大幅に削られるが、そのような省筆のうちに延喜帝の堕地獄は消滅していったと考えられる。それでは覚一本に描かれる延喜帝像は、延慶本とどのように相違し、またどのように共通するのだろうか。この点を述べて結びとしたい。

【表1】の引用番号①②③にあたる記事は覚一本にも見られる。つまり、延喜帝を聖代の代名詞として扱う傾向は覚一本においても延慶本と同様であることが確認できる。しかし平氏一門の参照枠として描かれる延喜帝堕地獄説話はみられなかった。そこで覚一本の延喜帝像を考える際問題となるのは、唯一延慶本には描かれない覚一本における延喜帝の用例、すなわち巻第

三「医師問答」の本文である。

延喜御門はさばかンの賢王にてまし〳〵けれ共、異国の相人を都のうちへ入させ給たりけるをば、末代までも賢王の御誤、本朝の恥とこそ見えけれ。況や重盛ほどの凡人が、異国の医師を王城へいれん事、国の辱にあらずや。（上一七一頁）

周知の通り、平家物語において重盛は理想的な徳人として描かれており[20]、そのような賢臣の補佐を失ったことをきっかけとして清盛の暴走が始まってゆく。右の記事は、そのような物語における大きな転換点の一つである重盛病死に先立って語られる。なお、同じ場面自体は延慶本にも存在するが、延喜帝には言及されていない[21]。引用本文では、清盛に「宋朝」から渡ってきている「勝れたる名医」を勧められた重盛がこれを激しく非難して拒否する際に「延喜御門」の例が引き合いに出されている。延喜帝が「異国の相人を都のうちへ入」れるという「御誤」を犯したという記事である。本文では重盛が自分の行為を延喜帝の誤りに喩えているようだが、論理的には今同じ誤りを清盛が犯そうとしているとの批判の言葉であり、ここでも延喜帝は清盛の参照枠として語られていると言える。

この「医師問答」の記述からまず想起されるのは［引用⑤］の本文であろう。賢王の誤りを引き合いに出して現状に喩える文脈や、反語によって過去を理想化し現在を低める表現、またそれが清盛の行き過ぎた行動を諫める重盛の言葉であることなどが一致している。覚一本の延喜帝像を扱う本章の結論としては「医師問答」の例も［引用⑤］と同様であると考えるのが妥当であろう。すなわち、「医師問答」の延喜帝は宮廷の内にある「聖主」の造形から外れていない、という結論である。ならば覚一本の延喜帝像を通して見たとき延慶本からの変化は明らかである。延慶本で地獄に堕ちた延喜帝に見出せた象徴的位相は断片的なものにとどまり、覚一本全体を通してみると延慶本に比べて鮮やかには見て取れない。覚一本の延喜帝像は、聖代観の枠組みから出ていないと言えそうである。

しかしそれにしても、延喜帝が「異国の相人を都のうちへ入」れたことはなぜ「賢王の御誤、本朝の恥」なのであろうか。今、もう少しこの点にこだわってみたい。引用本文には「見えけれ」とあるので何らかの先行文献を想定しているものと思われる。例えば『源氏物語』桐壺巻には、次のような本文がある[22]。

そのころ、高麗人の参れるが中にかしこき相人ありけるを聞こしめして、宮の内に召さむことは宇多帝の御誡あれば、いみじう忍びてこの皇子を鴻臚館に遣はしたり。（三九頁）

いわゆる高麗人の相人による予言が描かれる場面の導入部であるが、高麗人を宮中に入れるのは「宇多帝の御誡」があるので光を「いみじう忍びて」遣わしたと述べられる。ここでは宇多帝が異国人を宮中に入れることを戒めたことになっている[23]。

『河海抄』に既に指摘されていることだが、桐壺帝は宇多の子である延喜帝をモデルとして描かれている側面がある。ならば、『源氏物語』のこの場面では延喜帝と異国相人の接点が意識されているのかもしれない。また逆にこの場面から両者の接点が喚起され後世に再生産されたということも考えられるだろう。

『大鏡』昔物語には異国相人が忠平らを占う話があり、時代を考えるとこれは延喜帝の代のことであろう。それが『古事談』第六の四八段では延喜帝自身が御簾越しに対面し、「此の人国主たるか。多上小下の声なり。国躰に叶ふ」と言われて「恥じ」たことになっている。占われた忠平も結果を不服とし、「今の相は所見尤も恥となす所なり」と言う。[24] 少なくとも延喜帝が異国の相人を京中に入れたという言説は中世に広く語られたようである。そしてそこには常に何らかの問題意識、あるいは後ろめたさが付きまとっているように思われる。

一旦臣籍に下りながらも再び皇統に接近してゆく皇子の物語である『源氏物語』が可能となったのは、密通と並んで高麗人の相人による予言という秘密裏に行なわれた行為にひとつの要因を見出すことができる。[25] またそこで意識されていたと思われるプレテクストに例えば『日本三代実録』の「光孝天皇即位前紀」が指摘されている。そこでは光孝天皇の異例の即位が高麗人の相人の予言により必然性を与えられているという。他にも『懐風藻』の大津皇子の例など複数の準拠が指摘されており、「異国の相人」という言葉には皇統にまつわる異例を可能にする不思議な力が重層的に喚起されていた可能性がある。あくまで可能性の域を出ないが、以上のことが了解されれば「異国の相人」は日本という枠組み、天皇の聖性という社会規範を相対化し、皇統譜の原理を逸脱してゆくエネルギーの供給源となり得る不穏さをまとった存在と見られていたことになる。

重盛は清盛を延喜帝に喩え、異国の医師を異国の相人に喩えていた。引き合いに出された延喜帝のエピソードは、あるいは『源氏物語』を意識させる気の利いた言い回しであったのだろうか。もしくは言談の中に語り継がれた有名な話であったかもしれない。いずれにせよ、「医師問答」の延喜帝像は王権の絶対性に関わる危機を暗示していたと言えそうである。その意味で、ここでは延喜帝が聖帝であるがゆえに、その誤りが重大な危機と認識される逆説が成立している。それは延慶本の延喜帝像に通じる、反転する社会規範の象徴表現と考えられる。

「昔」の聖代を代表する延喜帝は、このような逆説あるいは反語表現の中で引き合いに出される必然性を孕んでいるようである。延喜帝の持つ表裏一体の明暗は覚一本においても部分的には保持されている。しかしそれが平家の盛衰のアナロジーとしてはっきりと機能させられているのは、むしろやはり延慶本の方である。前述したように覚一本ではそのような延喜帝の象徴的位相が延慶本ほど鮮やかには見て取れない。逆に言えば、延慶本における延喜帝像の反転は特筆すべき顕著さを呈しているということになる。他の諸本を調査するには至っていないが、もしこの特徴が延慶本のみに見えるものであるとすれば何かそれなりの理由があるのかもしれない。あるいは延慶本の成立圏

の問題と関わってくる議論である。これらの点については今後更に追究していきたい。

【注】

(1)『平家物語』覚一本の引用は新日本古典文学大系、延慶本は勉誠社版の本文に基づいた。但し私に表記を改めた箇所、句読点を添削した箇所がある。また引用に際しては頁数を付記した。以下同じ。

(2)田島公「延喜・天暦の「聖代」観」(『岩波講座日本通史5古代4』岩波書店、一九九五)三五〇頁。

(3)田島前掲論文が通史的に論じている。他に代表的な延喜聖代観の研究は、藤木邦彦「「延喜・天暦の治」再論」(『歴史と文化』Ⅸ、一九六七)、所功「平安後期における延喜時代観」(『古代学』一四-二、一九六八)、林陸朗「所謂「延喜天暦聖代説」の成立」(『延喜天暦時代の研究』吉川弘文館、一九六九)などがある。また、伊藤喜良「王土王民・神国思想」(『講座前近代の天皇4』青木書店、一九九五)や大津雄一「軍記と九世紀」(『軍記と王権のイデオロギー』翰林書房、二〇〇五、初出一九九八)は九〜一〇世紀の社会的転換が天皇の聖性というイデオロギーを生んだと論じる点で本稿の論旨と呼応する。一方延喜帝堕地獄説話に関して、天神研究の立場からは山本五月「『道賢上人冥途記』に見る道真像」(『解釈と鑑賞』六七-四、二〇〇二)などが、平家物語との関わりからは村上学「縁起以前」(『海王宮』三弥井書店、二〇〇五)が詳説している。

(4)平家物語中の延喜帝には巻第十「高野巻」にもう一つだけ用例があるが、延喜帝像には直接関わりが見出せないため本稿では扱わなかった。高野山で入定した空海のもとへ延喜帝が夢想に従って使者を送り、入定した空海による返事を聞くという説話である。なお、平家物語と同時期成立の歴史叙述である『保元物語』『平治物語』『承久記』『六代勝事記』には特に際立った延喜帝言説はみられなかった。

(5)『大鏡』昔物語では延喜帝が衣を投げたことになっている。それが『中外抄』上四では一条帝が衣を脱いだ話となる。『古事談』第一の三四はこれに依拠しつつ、割注で「或説延喜仰」と書く。『続古事談』巻第一の一も『中外抄』に依拠し、続けて延喜帝が衣を投げた話を並べ記す。『宝物集』巻第六、『十訓抄』上一ノ一では仁徳帝が民を祝った話と並置して一条帝が衣を脱いだ話を載せる。

(6)延喜帝以外に聖代の参照枠として語られる人物を確認するため、試みに覚一本と延慶本の本文から「聖代」「聖主」「賢王」「賢主」の用例を引いてみた。用例に頼ったため取りこぼしもあるだろうが、聖代の参照枠となっているのは主に延喜帝・村上帝だけであるようだ。なお、古代中国の皇帝を故事として描く記事には、聖代観の参照枠と呼べそうなものがいくつかあった。平家物語にはやはり「昔」を理想化する傾向が見て取れそうである。

(7)ここで言う「宣旨」は、歴史学で扱う文書としての宣旨ではなく、平家物語の生成期におけるイメージとしての宣旨である。つまりここでは、「公文書の一つ」という意味ではなく「天皇による直接の命令」という意味での「宣旨」を問題とする。なお本稿では物語構造の単純な覚一本の用例を用いて引用・立論したが、延慶本における「宣旨」の用例に関しても、分母は多いが天皇王権にとって宣旨が次第に有効な機能を失ってゆく様は覚一本と同様のことが言える。また第二末では「平家ノ討手ノ使、三万余騎ノ官軍ヲ卒シテ、国々宿々ニ日ヲ経テ、宣旨ヲ読懸ケレドモ、兵衛佐ノ威勢ニ怖テ、従付者ナカリケリ。」(上五三九頁)「一切宣下ノ旨ニカ、ワラズ、弥ヨ日ニ随テ、兵衛佐ノ威ニ恐レテ、東海東山等ノ輩ラ、皆ナ源氏ニ随ニケリ。」(上五五六頁)と宣旨が無効

化した理由として頼朝の武力に屈したことがはっきりと述べられる点も本稿の主張を補強する。延慶本における宣旨の用例に関しては稿を改めて詳述するつもりであり、その用意もあるが、少なくとも本稿の論旨には抵触なくむしろ補強するものであることは明記しておきたい。

(8) 検非違使の職掌や天皇に直属して穢れを制御する性質は丹生谷哲一『検非違使』(平凡社、一九八三) に詳しい。

(9) 富倉徳次郎『平家物語全注釈(上)』(角川書店、一九六六) など

(10) 兵藤裕己「歴史/物語の構造」(『物語・オーラリティ・共同体』ひつじ書房、二〇〇二、初出一九八一)

(11) この引用本文では宣旨と並んで「院宣」が問題になっているので、平家物語における院宣の用例について説明しておく。院宣については覚一本と延慶本でほぼ同様の機能においてしか描かれていないが、山門大衆との交渉、以仁王返還の要求、平氏追討院宣(福原院宣・義経への命令)、平氏に取引を要求する屋島院宣などが主な例である。基本的に後白河の裁断が「院宣」と呼ばれているようであるが、現実的な政治家の政策である「院宣」には「延喜聖代」の「宣旨」にあった絶対性の象徴度は薄いようである。

(12) 義仲のコミュニケーション不通性に関しては大津雄一前掲書所収「義仲考」(初出二〇〇〇)「義仲の愛そして義仲への愛」(初出一九九〇)、高木信『平家物語・創造する語り』(森話社、二〇〇一)のⅢにおいて詳細に分析されている。

(13) 冒頭の[引用①]は、屋代本では「将門之序」として巻外(「平家抜書七ヶ条之終」)に置かれている。新典社版の頭注では「目録にも記載がなく、何巻に位置すべきか不明」とされ、また「或いは平将門の乱を延喜聖代の終末から語りおこす物語があったものか」とも評されている(五一二頁)。富倉徳次郎『平家物語全注釈(下二)』(一九六八、二五六頁)も同様の解説をしており、大胆な説ではあるが、筆者には自然な見解であるとも思われる。もしそうであったとすれば、正当性を語る宣旨の詞が通用しない東国の武士たちが、暴力の論理を振りかざし西の論理を危機に曝す度に、「昔はよかった」と延喜聖代が喚起され語られたことになる。延喜帝にはそのような鍵概念としての側面が見出せる。

(14) 本郷和人『新・中世王権論』(新人物往来社、二〇〇四)

(15) 承久の乱後の京都における混乱に関しては他に五味文彦「京・鎌倉の王権」(『京・鎌倉の王権』吉川弘文館、二〇〇三)、山本幸司『頼朝の天下草創』講談社(二〇〇一)に詳しい。

(16) 阿部泰郎「ヲコ人の系譜」(『聖者の推参』名古屋大学出版会、二〇〇一、初出一九九六)にも簡略ながら指摘がある。

(17) [引用⑨]の和歌は平家物語以外に、a『大師御行状集記』第八十三、b『俊頼髄脳』、c『宝物集』巻第二、d『十訓集』五の十七、e『沙石集』巻第八ノ五、f『安撰和歌集』巻第十九釈教歌上三八〇の以上六つのテクストが管見に入った。アルファベットはおおよそ成立年代順である。aとfでは高岳親王の詠歌に対する空海の返歌となっており、fは真言宗の色彩が強いためaを参照したものと思われる。bではaの二つの詠歌の作者が逆転し、[引用⑨]の和歌は高岳親王の詠歌となっている。cdeは同じ逆転を踏襲しており、『日蔵夢記』の抄出と思われる挿話をその前に置く。この挿話は延慶本の[引用⑥]と同じ内容であるが、cには「秘密瑜伽ノ鈴」を握っていたとの言説がある。これは『日蔵夢記』の別の部分から混入したらしい語であり、同じ混入が延慶本にも認められることから延慶本には『宝物集』の記述が[引用⑥]と[引用⑦]とに分解した形で挿入されていると考えられる。deの挿話はともにcよりも『日蔵夢記』に忠実な表現であり、同様の母体から発生した説話であろう。ただ、この和歌を延喜帝の詠歌としているのは平家物語のみである(延慶本のほか、源平盛衰記でも巻第八「讃岐院の事」で延喜帝の歌として引き合いに出されている)。[引用⑥]の延喜帝の台詞「冥途ハ罪ナ

キヲ以テ主トス。聖人我ヲ敬フ事ナカレ」との内容的な類比が作用したのであろうか。これが積極的な改作であれ、偶然の産物であれ、プレテクストでは地獄に堕ちた延喜帝の状態を表すのに引かれた和歌が、延慶本ではそのような延喜帝の心境を表すための詠歌となっているのは大きな変化である。

(18) 謡曲「蝉丸」に引き継がれる、『今昔物語集』以来の蝉丸像である。そこでは更に蝉丸を琵琶法師の祖としており、当道座の時代まで実際に「蝉丸派」と呼ばれる琵琶法師らがいたらしい。蝉丸を醍醐天皇の皇子とするのは仁治三（一二四二）年成立の『東関紀行』が初出である。蝉丸像に関しては通史的に詳細な研究がなされている吉川理吉「蝉丸説話の源流と平安朝時代の俗楽俚謡に就いて」（『京都帝国大学国文学界二十五周年記念論文集』、一九二二）、むしゃこうじ・みのる「琵琶法師の系譜」（『平家物語と琵琶法師』淡路書房新社、一九五七）、篠原昭二「博雅蝉丸琵琶伝習説話をめぐって」（『白百合女子大学研究紀要』二、一九六六）、堀江美代「謡曲『蝉丸』考」（『日本文学論叢』二〇、一九九一）を参考文献として挙げておく。他に高橋昌明「境界の祭祀」（『日本の社会史Ⅱ』岩波書店、一九八七）は蝉丸の性質について的を射た議論を展開・総括している。また蝉丸と琵琶法師の関係に関しては兵藤裕己「当道祖神伝承考」（『平家物語の歴史と芸能』吉川弘文館、二〇〇〇、初出一九八八）に詳しい。

(19) 大津前掲書「後白河法皇の涙」（初出一九九八）他。

(20) 同注9

(21) 延慶本のこの場面では、三条帝の時雅忠という医師が名医の聞こえによって唐に呼ばれた話、允恭天皇が新羅の医師に治療してもらった話を並べ（いずれも『十訓抄』上一ノ二十一から引用）、「恥辱」「不覚」との評を付加して載せる。四部合戦状本や源平盛衰記にも延喜帝は引き合いに出されない。一方屋代本や百二十句本など語り系諸本は皆覚一本と同様の話を載せる。

(22) 引用は新編日本古典文学全集の本文に基づいた。

(23) 実際「寛平御遺誡」には「外蕃の人必ずしも召し見るべき者は、簾中にありて見よ。直に対ふべからざらくのみ。李環、朕すでに失てり。新君慎め。」とある（日本思想大系『古代政治社会思想』一〇五頁）。単に「外蕃の人」と対面する時は必ず御簾越しにせよとの戒めにとどまるが、宇多帝は直接対面したらしいことが伺える。

(24) 『古事談』の引用本文は新日本古典文学大系。五六三～五六四頁。

(25) 高麗人の相人による予言に関しては後藤祥子「叛逆の系譜」（『源氏物語の史的空間』東京大学出版会、一九八六）、河添房江「光る君の誕生と予言」（『源氏物語講座3　光る君の物語』勉誠社、一九九二）などに概括されている。

（やぶもとかつはる／本学大学院修士課程）